

第10回 日本構造医学会 東京学術会議特集



2005年10月22日(土) 国際ファッションセンターホール

両国にて東京学術会議開催

日本構造医学会は10月22日、東京・両国の国際ファッションセンターホールで、第10回東京学術会議を開催した。隅田川沿い、両国国技館にほどちかい会場に、全国から約300人の会員が集まった。

松本恭治・実行委員長、吉田勤持・日本構造医学会会長(理事長)の開会挨拶があり、すぐに午前の部の一般演題発表が始まった。



国際ファッションセンタービル全景

今回の構成は、午前の部に3つの一般演題、3つのポスタープレゼンテーション、午後は住岡輝明氏(水前寺診療所所長)の教育講演、7つの一般演題、前回の大阪学術会議につづき熊

谷光剛氏(歯科医師)による臨床レポート、最後に吉田会長による講演総括、感謝状授与が行われた。

一般演題の内容は多岐にわたった。発表者たちからは、それぞれの現場をとっても重視しながら臨床、思索を続けていることが伝わってくる。当然のことなのかもしれないが、それは各々の発表形式や何気ないひと言からも直接・間接に伝わってきたことが印象的であった。

一般演題と学会長講演総括

一般演題の1つ、「くも膜下出血からの生還」(大森晋平氏・柔整師、共同研究者・宮地尚彦氏)の発表は、講演者の母親がくも膜下出血で倒れ、手術後から構造医学的処置を開始、生理冷却や生理歩行を続けながら見事に回復するまでのレポート。“見事に回復”したことは、大森氏の発表に続いて、母親自らが患者としての自分の経過、現在の状態を報告したことで、会場にいた全員が実感したことだろう。1年前に病気をしたとはとても思えない元気で、ピアノの発表演奏会、海外旅行など、忙しく動き回っているとのことであった。

「ネフローゼ症候群の一例」(船越登紀夫氏・



左：展示資料

中：プレゼンスルームにて機器や資料を見る会員たち

右：会場風景

柔整師)は、夫人がネフローゼ症候群を発病し、吉田会長、住岡医博の治療を受けながら克服するまでの報告。吉田会長から“死にもの狂いで歩きなさい”と指導を受けたそうだが、講演総括のなかで吉田会長自身もそのことにふれた(以下に要旨)。

「低蛋白血症、蛋白尿と、これらが原因がよく分からないままに出てくる糸球体栄養通過障害の1例ですが、つねに何でも歩けばいいというわけではないのです。まず生活習慣がどうであったのかを検討し直す、また原因がどこにあるかも診なければならぬ。

腎機能は大半が濾過機能であるため、大きな分子量を持っている方に負担が大きくなります。ということは、ある意味では分子量の大きい蛋白質やその他の物質が、消化という重要な過程を経ていないということになります。

消化の過程で大切なものに、エンザイムという触媒機能を持った酵素集団があります。人体の中に400ぐらいのエンザイムが、組み合わせとしては、16万以上が消化にかかわっているわけです。しかし特にストレスが存在すると、その状態が変化します。ですから通常の生活から自分はどうやって安定を保つのか、あるいは仕事にどう立ち向かっていくのか、そういう生き方全体の中で酵素が動くわけです。私が、死に



講演総括をおこなう吉田会長

もの狂いで歩きなさい、と言ったのは、それだけ動けば食欲も出るんです。食欲が出ればエンザイムも出るんですね。だから最終的に報告されているように、もとに戻るといえるのは何なのかということです。発症前の元の生活に戻っていくことを、元と本当にいえるのか…。救済ということが行われる可能性は、そういう気持ちの延長線上にあるだろうと思います」(会長総括より)。

会場に隣接したプレゼンスルームには、構造医学関連の機器や健康補助食品、書籍のほか、講演者たちの作成した資料が公開されていて、休憩時間には大勢の人が見入っていた。

なお、来年(第11回)は京都で開催される予定。